
八つ葉のクローバー

彩紋アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハツ葉のクローバー

【NZコード】

N6383Y

【作者名】

彩紋アキラ

【あらすじ】

鎧塚山キャンプ場にあるロッジのテラスで、女性の死体が発見された。通報を受けた警察が駆けつけたところ、その死体は裸にされており、その背中には大きく『罰』という文字が刻まれていたのだ。動機は何？ 犯人は誰？ なかなか解決できそうにない警察の前に、とうとう迷探偵が登場！

その一（前書き）

これが第2作目の投稿となります。前回は「少年もの」だったので、意識的に死体なき謎だけで構成してみましたが、今回はやっと死体解禁です（＾＾）

少しでも楽しんでいただけたなら、作者としては嬉しい限りであります。

5月1日の午後6時過ぎのことである。海崎奈央美の携帯から、メール着信を知らせるメロディが流れた。

奈央美がメールを開くと、それは中学時代からの友人である吾妻彩子からのものだった。

今田はいろいろな山菜を摘んで来ました。

これからテ麿羅にしていかがおう。

今更驚くほどの珍重にものたり。豊潤ある一羽が珍らしく思はれど、

今日はとても珍しいものを見つけたのよ。

それが何だか奈央美に分かるかな？

正解はれ
ハ二葉のクロロハ

早速、押し花みたいにして保存しましたよ。

では到着を待つてるからね

画像が添付されていいる表示があつたので、奈央美はケリッケリした。

「うう、おまえの母はおまえの母で、おまえはおまえだ。」

質は不鮮明であつた。

5月2日早朝。

鐘見隆広は目を覚ますと、反射的に室内を見回した。

「…」井と様子が違うのは察付いた脳からの話では、従つただけのことだが、視線がゆるりと一周を終えた頃には、脳の中止命令が出された。

そうだ、ここは鎧塚山キャンプ場の中にあるロッジなのだった。

今年の3月末をもつて出版社を退職した鐘見は、自由人になつて初めて迎えるゴールデンウィークを有意義に使おうと考え、退職の日まで2ヶ月近くを残しているというのに2月初めには予約を済ませていた。そして昨日の夕方にマイカーで家を出発して、4時間半を掛けてやつとここに到着したのである。

約40年に亘つて勤めた会社では、それなりに職責を果たしてきたつもりだ。いくつかのへマはあつたものの、辛うじて大過なく無事に退職できたことは喜んでいいのだろう。ただ、その記念すべき日を祝つてくれたのが、上司と数名の同僚達だけといった職場関係者だけであつたのは、いささか残念であった。

妻とは14年前に離婚していたし、一人の子供達も既に結婚して独立している。妻と別れてからの寂しさは未だに消えはしないが、そのことを今更後悔しようとも思わないし、そのように考えたところでただ空しいだけ・・・と悟らされるには充分に足りるだけの年月を経ていた。

ロッジは杉の丸太で拵えられたログハウス様式で、1階にダイニングキッチン・バス・トイレ・居間があり、ロフトになつた中2階にベッドルームがある。ひとりで宿泊するには勿体無いほどの広さだ。更に、南側の吐き出し窓から外に出ると、そこは地上から1mほどの高さのウッドデッキとなつており、檜製の大きなテーブルと椅子が置かれている。

鐘見はベッドから降りると、パジャマから外出用の軽装に着替えて、手摺り伝いに檜製の階段を下りていった。薄紫色した早朝の光が、大きなガラス窓から部屋一杯に射し込んでいた。

朝食は予定通りに手抜きをして、昨日ここへ来る途中のコンビニで買い込んでおいたサンドウイッチを食べることにする。しかしコーヒーだけは手抜きする気になれず、自宅から持つてきたコーヒーメーカーで淹れることにした。

「なんて美味しいのだ」

自然に言葉が口をついて出た。

腹ごしらえを終えると、火を点けていない煙草を咥えて屋外に出てみた。現役時代を都会で過した者にとって、いま田に飛び込んでくる緑の世界はまるで異空間のように感じられた。一歩ずつ感触を楽しむかのようにゆっくりと階段を下り、産まれ立ての空氣の中に歩を進めた。昨日到着したときは闇一色の世界であったが、今はキャンプ場の佇まいがくつきりとした高画質で目に映る。

キャンプ場の西側は七瀬川に面しており、更にその西側には県道26号線が南北に走っている。県道からキャンプ場に入るために七瀬川に架かつた鎧塚橋を渡ると、管理棟前に到着する。ロッジはキャンプ場の奥側となる区域に全部で7棟建つており、七瀬川に近い側のエリアにはテント張り用の区画が30余り配置されている。夏ともなれば全区画隙なく隣めき合つて、色とりどりのテント村が出来上がるのだろうが、今はまだ本格的にキャンプを楽しむには早すぎる季節とあって、本日は8張のテントが適度な間隔を置いてあちらこちらにと散らばつて並んでいた。

ロッジの玄関から真っ直ぐに伸びる砂利敷きのアプローチを10mほど進むと、南北に伸びる簡易舗装された道に出た。鐘見は少し考えてから、南方向にと進んでいった。左にはロッジが並び、右にはテントサイトが広がっている。その道をそぞろ歩きしながら、そして、とうとうあのロッジの前に立つてしまふことになつたのだ。

第六感というものは本当に存在するのかも知れない。

鐘見のロッジから一軒田となるロッジの前を通り過ぎようとしたときのことである。

後から考えると不思議というしかないのだが、事実、何か得体の知れないざわめきを感じて、ふと左側に目をやつたのだ。そこは、そのロッジの南側に当たるスペースで、隣のロッジとの間は15mくらいあるだろうか。一面に落ち葉が敷き詰められた場所に、何やら白い物が落ちているのが分かった。

今までの鐘見なら、そんなものに興味を示すことはなかつたであろ

うが、深い自然の中に抱かれたことで日常とは異なる精神状態になつていた所為なのか、気が付いたときには、歩み寄つて1枚の布切れを拾い上げていた。

それは布巾と思われた。とすれば、これが落ちてきたのは目の前のロッジからである。鐘見は至極自然な動きで、中腰のままの姿勢でロッジの方に目を移した。

ロッジは全棟同じよう造られているらしく、見上げた先にはテープルの置かれたウッドデッキのテラスがあつた。

このテラスには転落防止用の手摺りが設置されており、道路側の手摺りには外側に目隠し用の板が張られていて、最初に布切れが落ちていると気付いた地点からは、テラス上の様子は全く見通せなかつたのだが、この場所からは全体が見渡せた。

徐々に腰を伸ばしていくと、やがてテーブルの上にいろいろな食材などが並んでいるのが見えてきた。

同時に鐘見の目に入つてきたのは、土色に変化した肌の女性が床板に倒れているという光景であった。意外なことに気持ち悪さは余り感じなかつた。何かに突き動かされるように、手摺りを掴んで昇ろうと試みた。体力の低下は否めず一度目は失敗したが、二度目の挑戦でやつと上に辿り着くことができた。

テラス上に立つてよくよく観察すると、テーブルには携帯用のガスコンロに天麩羅を揚げるための鍋が乗つていた。ガスコンロの火は消えており、ボンベの中身が無くなつた状態のように思えた。鍋の手前には食器類や調味料入れが並び、ただいま食事中という雰囲気のままの状態が広がつており、テーブルの右半分には、溶いた小麦粉の入つたボールと、幾種類かの山菜が並べられた大きなパット、そして天麩羅の載つた紙皿などが置かれていた。

派出所勤務の名坂巡査長は思いつきりのスピードでバイクを飛ばす。目指すは鎧塚山キャンプ場だ。

変死体を発見したというキャンプ場管理人からの通報を受けたのは7時を過ぎた頃であった。今まさに用意が整つたばかりの朝食に未練を残しながら、トーストだけを口に咥えて派出所を飛び出した。公僕という立場は、時にして自虐を求められるものだと自己満足しながら、スロットを手前側に目一杯回す。ずつと勾配の続く県道を七瀬川沿いに上つて行くと、やがて川向こうに目指す鎧塚山キャンプ場が見えてきた。

鎧塚橋を渡り切った直ぐのところにある管理棟の前でバイクを止め、声を掛けたが応答はなかつた。仕方なく奥に進んで行くと、やがて左前方に人だかりが見えてきたので、その方向にハンドルを切つた。南から4棟目に当たるロッジ前に、十数人の男女が興味津々なる表情で立ち並んでいた。

バイクを止めてよく見ると、ロッジの敷地を取り巻くようにしてロープが張られており、その外側から野次馬達が覗いているという図だ。

「誰も何かに触つたりしていないだろうな？」

名坂はバイクから飛び降りると、咎めるような口調で皆に聞いた。地元派出所に配属された巡査にとっては、現場保全こそが最も優先されるべき職責なのである。

「少なくとも、私が来たときからは誰もここには入つていないと断言できます」

カマキリのように痩せ細つた体形の男が一步前に進み出で、

「通報した管理人の富岡です。命じられたとおりにロープで囲つておきました」

と、自慢げに言った。

「ああ、御協力に感謝します」

名坂は軽く手を上げて、

「最初に言つておぐが、撮影は厳禁だからな」と、野次馬連中を見回しながら声を張り上げた。

何人かが慌てて携帯電話を仕舞う。恐らく既に撮影会は完了済みな

のだから。

「ところで、第一発見者はどじだ？」

「いじらじで居ますよ」

富岡が、隣に立っている鐘見を指をして示した。

「鐘見と申します」

初老に片足を突っ込んだばかりかと思える年齢の男が、名坂に向かって軽く頭を下げた。

「発見したときの様子を教えてもらえますかな」

下手に構えた口調であるが、有無を言わざぬ雰囲気をも漂わせていた。

「今朝は6時頃に田覚めまして、簡単な朝食の後、何となく散策でもしてみようかという気になりましたね。それで、ぶらぶらとこのロッジの前に通り掛かったところ・・・」

「この現場を見てしまったとこじりですかな?」

「はい、まあそういうことです」

「そのときに見たものと、今見えているものと、何か違うとこじりませんか?」

「自信はありませんが、何も変わったとこじりはないよじこ思ひます」「そうですか・・・。もつすぐ県警本部からの捜査員が到着する手筈になつていて、皆さんにあらためて証言を求めるということになりますので、それまでにどんな些細なことでも記憶を呼び戻しておいていただければ助かります。本官から申し上げるのはそれだけです」

その時、段々と近付いてくるパトカーのサイレンが聞こえた。初動班が到着したようだ。

「こいつは・・・」

その死体を目にした瞬間、佐々木検視官は思わず唸つた。

二度と動くことのないその裸体は、テラスへの出入口である吐き出し窓とテーブルとの中間辺りに、身体の左側を下にして横たわっていたのだが、その背中にはこれまでに見たこともない異様な装飾が施されていたのである。

背中一杯に大きく『罰』という文字が刻まれていたのだった。刃物の切つ先を使って皮膚に刻み込んだのであるうと思われた。しかし出血の程度はごく微量で、切り口の状態もエッジが綺麗に立つたままだ。これは明らかに死後に付けられた傷であるう。

セミロングである髪の中を覗く。左後頭部に若干の打ち傷らしきものが見られたが、そのうつ血程度はかなり軽く、恐らく倒れたときに地面に打ちつけて出来たものだろうと思われた。

背中側からの観察を終えると、今度は慎重に身体全体をひっくり返した。既に死後硬直はピークに近く、仰向けにしても母胎内の赤ん坊のように丸まつた姿勢を保つたままだ。

平均サイズより少しばかり豊かな胸部起伏から、死体が明らかに女性であることは疑いようもなかつた。

下半身へ向かって目線を移動させていく。

「おかしいぞ・・・」

佐々木は思わず呟いた。

胸部から腹部にかけてのどこにも、全く傷跡が見当たらないのだ。

背中の刻印を見たときには、これは刃物を使用して殺害したのだろうと勝手に推測していたのだが、その予想は完全に外れたことになる。

腰から下にも目を遣つたが、やはり目立つた外傷は無いようだ。外

見からの観察では、大腿部から爪先にかけてのどこにも、致命傷となるような損傷は見当たらない。

そこで佐々木は、腕を押し開いて脇の下を覗くことにした。ここから細身の刃物で心臓を刺すという殺害方法があるからだが、その結果は薄目的無駄毛と対面しただけに終わった。

最後に残された場所は、閉じられて密着したままの股間部分だけとなつた。同僚の助けを借りて両脚を開いていく。思いつ切り力を込めると間接の壊れるような軋む音とともに、やつと10度くらいの角度まで開くことができた。

だがそこにも、死に至つたであろうことを示す痕跡は何ひとつ見当たらなかつた。

外傷が見当たらないとすれば、死因はいつたい何だ？

そして、着衣はどこに行つたのだ？

佐々木は膝の埃を払いながら立ち上がり、ロッジへの入り口である吐き出し窓から室内に移動することにした。まず、入り口に頭だけを突っ込ませて中を覗いてみた。入つて直ぐのとこに大きく引き裂かれたシャツと切り裂かれたジーンズ、そして女性特有の下着類が、まるで捨てられたゴミの如くに散らばつていた。

死体周辺の調査を一通り終えると、続いて足跡を調べることにした。室内の足跡は、フローリングの床とあつて、靴下を履いた場合には期待するほどの鮮明さでは出でこないだろう。案の定、何箇所からは採取できたものの、辛うじて足のサイズがある程度まで判別できるといった程度だ。

佐々木は屋外に出た。玄関からは木製の階段があつて、その先は砂利敷きのアプローチとなつていて、ここから足跡を採取するには諦めて、テラスのある南側にと回つた。

そこは地肌を見せたままの平らな地面となつており、何箇所からかなり鮮明な足跡を採取することができた。

足跡は、全部で3人分のが確認できた。

そのうちの2人分は、常に同じような間隔と位置関係で残されてい

ることから、2人揃つて同じ行動を取つたときに付けられたものと思われた。南隣のアプローチを出発点として、現場となるロッジの数m手前まで進んだあと折り返して、最後には元の出発点にまで戻るよう続いていた。

あとの1人分は、ロッジ前の簡易舗装道から始まっており、道路からほぼ垂直に進んだあとで少し方向を変えて、最後にはテラス下にまで到達していた。だが、帰りの足跡は発見できなかつた。

5

「所轄から中年の女性だという報告は受けたが、ガイシャの身元はもう判明したのか？」

県警から駆けつけたばかりの松浦警部補が、管轄署の若い巡査に訊く。

「ここは一番南に位置するロッジである。たまたま空室であったので、そこを急ごしらえの仮設捜査本部として借りたのである。

「はい。宿泊名簿と携帯電話から確認したところでは、吾妻彩子、32歳、現住所はF県Y市といったところです。」

「32歳なら中年と呼ぶのは少し可哀想だな。最近の初婚年齢を基準にすれば、まだまだ適齢期の範囲内だろう・・・。こいつは異性関係という線が充分に考えられるな」

「その辺の捜査は、これからということになります」

「ここへは誰かと一緒に泊まつていたのか？ それとも一人でか？」

「管理人の証言によりますと、ガイシャはひとりでやつて來たようですが・・・明日には連れが到着して合流する予定になつていたようです。ガイシャが宿泊名簿を書くときに『明後日から友達が合流するのでついでに書いておきました』と言つて、連れの名前も記入したということです」

「ふーむ。連れとはどういう関係？」

「ただの友人だと思われますが、氏名は海崎奈央美、年齢はガイシャと同じ年です」

「男じゃないのか？」

残念そうに呟いてから、

「で、初見による死因の方は？」

と続けて訊く。

「外傷として一番大きいものは背中に文字として刻まれた傷なので
すが、どうやらそれは死後に付けられたものらしく、その他に死に
結びつくような外見上の傷は見当たらなかつたこと。死体の近くに
は嘔吐物があつたこと。これらから、死因の特定は司法解剖のあと
になることがあります、現時点では毒物による死亡の可能性
が高いと考えられるようです」

ひととおりの報告を終えた警官が去つていくと、松浦はプリントさ
れたばかりの現場写真を机の上に並べた。

「この背中の文字は一体どういうことだ？」

松浦がテーブルの上に並べられた現場写真の中の一枚を手に取つて、
隣に立つてゐる各務刑事の眼前に翳して見せた。

「犯人の意図はわかりませんが、鑑識班からの報告書によると、傷
口からは生活反応が見られなかつたようですね
結構ですとばかりに写真を押し返しながら、各務が答えた。

「しかし如何にも酷過ぎる仕打ちだと思わないか。この何とも屈辱
的なというか加虐的なというか、死体の皮膚を切り裂いてまでして
悪意の含まれた漢字を書き残すとは、ガイシャは余程恨まれていた
ということだな」

「検視の結果、暴行された形跡はなかつたようなので、襲おうとし
たところ騒がれたから殺害した・・・といった単純な事件だとは思
えませんね。もしかしたら、犯人は知り合いかも知れませんね」

「まあ、行きずりの犯行ではないと考えて、ほぼ間違いないだろう。
ただの暴行目的犯なら、このよつたな落書きをする時間があつたなら、
きっと他の行為に及ぶだろう」

「相手は32歳の女性ですからね。手間を掛けて裸にまでしておい
て何もそういう行為の跡がないってのは・・・やはりこれは怨恨

の線でしょつか？」

「恐らくな。で・・・このキャンプ場に来ていた全員に対する身元調査は終わったか？」

「はい、ちょうど今さつき終わったところです」

「管理人のところに行つて宿泊名簿と突き合わせるんだ。確認漏れはないか、犯罪歴のある者が居ないか、そして重要なのは名簿の中にガイシヤと知り合いの人物が存在しないか、それを急いでチェックさせるんだ」

「はい、既に指示しております」

「よし、ある程度は状況が把握できたところで、次は目撃情報といこう。まずは第一発見者に会おうではないか」

松浦は気合を入れるために木製のテーブルを拳で叩いて、すつと立ち上がった。

「鐘見隆広さん・・・ですね。あなたが目撃された経緯とそのときの様子について、できるだけ細かく説明していただけますかな？」

丁重な口調で、松浦が切り出した。

「こと細かくとおっしゃられても、そんなに細かいところまでは覚えていませんが、記憶の範囲で精一杯お答えさせていただきます」
やや薄くなつた前頭部の汗を拭きながら、鐘見が抑えた声で言つた。
「ええ、それで結構です。では、あなたが被害者のロッジに到着した前後のことについてお話ください」

「私が借りているロッジを出発したのは、午前6時をある程度過ぎたときのことだと記憶しています。途中で景色を眺めようとして立ち止まつたり、軽く体操をしたりという感じで歩きましたので、例のロッジに辿り着くまでに5分くらいは経過していただろうと思います。だから、私が現場に到着したのは、6時20分前後だったのではないかろうかと思います」

「鐘見さんがロッジを出てからあの場所に到着するまでの間に、あ

なた以外の誰かを見ましたか？

「いいえ、近くには誰も見かけませんでした。見渡せる範囲には私

だけしか居なかつたようでした」

「途中で何か物音を聞いたりとかしませんでしたか？」

「特に記憶していませんね。もつとも、ここはすぐ近くを七瀬川が流れていますから、四六時中、昼夜の別なくせせらぎの音が聞こえていますので、ある程度大きい音でなければ消し去られてしましますし・・・」

「それでは、鐘見さんがあそこで目撃したことを話してください」

「あのロッジ前を通り掛ったときには特に何も感じませんでした。ところが、じつにこのを神の啓示とでも言うのですかね・・・」三歩前進したときに、何かが視界の端っこに映つたのです。日の出時刻を過ぎていては言え、ここは山の中にある所為でまだ薄暗い状態でしたから、普段なら気付かなかつたのかも知れません。しかし、何故かあのときは鮮明に映つて見えたのです。暗い地面に何か白い物が落ちているようだ・・・何故か気になつて近寄つて行き、それを拾い上げてみると一枚の白い布巾でした」

「布巾？」

「何の変哲もないただの布巾でしたが、それが布巾だと分かつた時点で、同時に、これがどこから落ちたのかといふことも推測できますよね。そう、すぐ近くのウッドデッキから落ちたものだらうと・・・。それで、立ち上がりロッジの方に目を遣つたとき、テラスに置かれているテーブルの、その脚の向こう側にあのおぞましい光景を見てしまつたのです」

その光景を思い出して汗が吹き出たのか、鐘見がハンカチで何度も額を拭う。

「それは、それは・・・さぞや驚いたことでしょう」

「驚いたと言うよりも、世にいふところの『頭の中が真つ白になつた』状態でした」

「心中お察し申し上げます。で・・・他に見たものは何があります

か？」

「テーブルの真ん中付近には携帯コンロが置いてあって、そこに天麩羅鍋が架かっていました。その近くに塩や醤油といった調味料が並んでいて、その他には小麦粉を水溶きしたボールと天麩羅油・・・、それといくつかの食材を載せたパットやお皿などがありましたね」「ほほう、食材というのはどんなものでした？」

「そのほとんどはこの近辺で採取してきたと思われる山菜でしたが、イカやエビなどもあつたかと思います」

「包丁はどうでした？ 見ましたか？」

「さてどうだつたか・・・、残念ですがそれは記憶していません」「鐘見は額にハンカチを当ててしばし考え込んだ後、やがてそう答えた。

「何かまた思い出されましたら、ぜひ」連絡願います。とにかくで、ロッジ内も覗かれましたか？」

「あ、ええ・・・ほんの少しだけですが」

「どんなものを見ました？」

「最初に目に入ったのは、被害者が身に着けていた衣服だと思われるものでした。『思われる』と申し上げたのは、それらがとにかくバラバラに切られていたので、ブラジャーとジーンズだけはそれと判別できましたが、それ以外のものが何なのかは分からなかつたからです。引き千切られたような箇所もあつたような気がしますので、きっと無理矢理に脱がされたのでしょうか」

「他には何か？」

「リュックが緑色のもので、右の奥の方・・・ロッジの正面玄関を入つて右側・・・に置かれていたのは記憶しています。あとは、居間のテーブルの上にデジタルカメラが置いてあつたかと思います。申し訳ないですが、思い出せるのはそれくらいですね」

「あのテラスの下には、何人かの足跡が残されていましたが、その中にあなたの足跡も含まれていますかね？」

「テラスに到達するまでの足跡は残されていると思います。ただ、

あのロッジから出て行くときには、あの高さから飛び降りる気にもなれず、室内に一旦入って玄関ドアから出て行つたので、足跡は残つていないのでしょうか

「そのとき、玄関には鍵が掛かっていなかつたということですかな？」

「掛けっていたのでノブの金具を捻つて開けたのか、それとも掛けていなかつたのか・・・、誠に申し訳ないのですが、その点はよく覚えていません」

「ところで、昨夜の7時から9時にかけての間、どうぞれていました？」

「アリバイですか？ それならばつきりしています。その頃はこちらに向かつて高速道路を走つておりました。こちらへ到着したときには10時を少し廻つていたと記憶しています。これは管理人さんにお確かめいただければ直ぐに分かることでしょう」

「そうですか。本日は御協力ありがとうございました。またお尋ねすることがあるかも知れませんが、これも亡くなられた被害者のためですから、どうか悪しからず」

松浦はそつと名前を手招きして、鐘見を送り出させた。

「名簿の方からの調べはどうなっている?」

松浦が各務に聞いた。

「昨日の宿泊名簿に記入されていたのは、テント利用者が13人とロッジ利用者が6人の、合わせて19人。そして所轄が聞き取りで確認したときの人数が20人なので、その差が1人。しかし、その1人というのは幼稚園児なので親が記入対象外だと勘違いしていたものであり、名簿に書かなかつたとのことでした」

「すると人数は合うということか。それで、その中にガイシヤと接点を持つ者は居なかつたか?」

「今のところ、そういう人物は見付かっていません。ただし、宿泊者のうち3名は早朝に立ち去つておりまして、そちらに関しては住所地を管轄する所轄署に聴取依頼をするよう手配しておきました」
「ガイシヤと繋がる人物が絶対にいるはずだ。あれだけの遺体損壊をしたのにはそれ相当なる理由があつたに違いないからな」

「その点に関しても、それぞれの所轄署へ連絡して、更に詳しく調査するように手配しておきました」

「目撃者の方はどうだ。誰ひとりとして異変に気付いた者は居なかつたのか?」

「キャンペーン共用の施設である水道やトイレは七瀬川に近い場所に造られていますので、特に用がない限りは、ロッジエリアにテント利用者がやつて来ることはないと思われます。昨日の貸し出しテントは僅かに6張だけだったので、七瀬川に近い場所を割り当てられていたようですから、尚更ロッジの近くまで誰かがやつてくる可能性は低かつたようです」

「包丁の方はどうなつていて? まだ発見できないのか?」

「ええ、周囲はこのとおりの大自然ですから、隠そうとすればいく

らでも候補地がありますからね」

窓の外を指し示しながら、お手上げだというポーズを取つて各務が言つた。

「背中での留字に使つた道具は、きっと包丁だと思つんだがな」「鑑識もそのように考へてゐるようです」

「それと・・・あの落書きに關して氣になるのは、生活反応がなかつたことだ。死亡推定時刻は昨晩の7時から9時といつことだが、あの落書きが刻まれたのはいつ頃だ?」

「鑑識に因れば、死後8時間プラスマイナス2時間程度が経つてから付けられた傷だと考へてゐるようです。もつとも、死後硬直は気温に左右されるので、ある程度の余裕幅は持たせないといけないようですが・・・」

「各務さんよ。それつてどういふことだ? 犯人は一度殺しておいてから、その後8時間も経つてからやつとあの文字を書いたというのか? それは何故だ?」

「たとえば、犯人はどうしても屋根のある場所に泊まりたかった。だがお金もなく泊まるところがなかつたので、目を付けたロッジの住人を殺害してそこに一泊した。朝起きてから、自分にとつて何らかの不都合な点に気付いた犯人は、それを誤魔化すために背中に文字を書いた・・・というのはどうでしょうか?」

「その推理に水を差すわけではないが、財布には何枚かのカードの他に10万円余りの現金も残つていた。お金がなかつたからとか、ロッジに宿泊したかつたからとか、そういうた動機と考えるのはかなり無理があるんじゃないかな?」

「そうでしたね」

「荷物も調べただろうが、そこから何か見付からなかつたのか?」

「ロッジ内から発見されたのは、バッグに詰め込まれた何着かの着替え類と、懐中電灯、数点のお菓子、山菜入門という本、軍手、ミニショベル、万能ナイフ、といったキャンプには必須と思われるアイテムだけです」

「万能ナイフ？ それを使つたという可能性はないのか？」

「血液反応はなかつたようですから、植物採取専用として携帯していたのでしょうか？」

「荷物やテントからは、不審な指紋は出なかつたのか？」

「菓子袋からは別人の指紋も出ましたが、流通過程でいろいろな人間の手を渡つているはずなので、複数の指紋が出てくるのは当然でして、それが誰のもののかは今のところ不明です。あとのものからはガイシャ以外の指紋はほとんど見付かっていません。それと、おかしなことに本の内側からは誰の指紋も出なかつたようです」

「犯人のヤツが不用意に触つてしまい、それで隈なく拭き取つたとでもいうのか？」

「そこはまだ分かりませんが、本を見るときは常に手袋を嵌めてからにしていたとか・・・我々の常識を超えたオタクなら、それくらい大切に扱つていたとしても強ち考えられないことでもありません」

「そういえば、アイドルオタクと呼ばれるマニアは、大切なグラビア写真集は必ず2冊購入して、うち1冊を鑑賞用、もう1冊は保存用としてラッピングしてしまうらしいな」

「よく御存知で」

「けつ、それくらいは常識だろ。しかし、仮にいくら大切な本だつたとしても、指紋ひとつ残されていなかつたというのは、どうも引つ掛かるな。繰り返しになるが、それにしてもよく分からるのは、死後数時間も経つてから背中に文字を書いたという点だ」

「たとえば、犯人が獵奇趣味だつたとか？」

「もし俺が獵奇趣味だつたとしたら、少なくとも背中だけを切り刻むことはないな。絶対に背中以外の女性らしい特別な部分を切り刻むだらうな」

「本人が死んでいるから良いものの、生きていたなら名誉毀損で訴えられるに違ひない暴言を、松浦は平然と吐いた。

「きっと何か意味があるはずだが・・・、それがさっぱり見えてこない」

松浦はイナバウアーの如くに深々と椅子に凭れ掛かって、小さく唸つた。

県警は地元消防団の協力を得て、近隣の捜索を実施することになった。

警察犬まで動員して捜索をしたもの、とうとう包丁を発見することは出来なかつた。それも仕方がないことではあつた。山あり谷ありの、大自然に囲まれた場所だ。凶器を隠す場所はいくらでも存在する。

一方、死体からはアコニチンが検出された。それはトリカブトの持つ強毒成分である。それを裏付けるように、司法解剖の結果、胃の中からは未消化のトリカブトが見付かつた。

被害者の死因は、トリカブトを食したことによる急性中毒であると鑑識は結論付けた。

管理人によると、あのキャンプ場からほんの少し山中に踏み入つただけで、簡単にトリカブトを見付けることが可能らしい。

「犯人が採取してきて、ガイシヤに食べさせたということか？」

松浦は一人で呟き、更に思考を続ける。

被害者のテーブルには何種類かの山菜が天麸羅の材料として置かれていたが、一見しただけでトリカブトだとはつきり分かるものは含まれていなかつた。紙皿に残されていた天麸羅の中も同様であつた。ということは、犯人はトリカブトの天麸羅を持参したうえで、それをガイシヤに気付かれないようにして、ガイシヤの揚げた天麸羅の中に混ぜたのか？ 数分間でも上手く席を外せることができたなら、それも可能なことだろう。そしてガイシヤはそれとは気付かずに食べてしまつた。犯人は計画を成し遂げたことを確認してから、その証拠となるトリカブトをひとつ残さず持ち去つたのだろうか。あの現場に残されていた山菜を、細かな破片も含めて、もう一度初めから調べる必要があるな。

そう考えながら、鑑識からの報告書を読み返す。

現場にあつた山菜の一覧には・・・ウド・タラノメ・ゴンゴロ・アケビ・コシアブラ・アザミ・タンポポといった山菜の名前が記されている。

松浦には、それがどういう山菜なのか半分以上はさっぱり分からない。

いや待てよ・・・。松浦には何かが引っ掛けた。解剖をすればトリカブトによる死亡だと簡単に判明してしまうことくらい、余程の馬鹿でもない限り簡単に予測できることだろう。それならわざわざ持ち去る必要などないのでは? ということは、ガイシャが全部食べ切つたということなのか? いや、それも何となく違和感が残る。それに、ガイシャは山菜の専門書を持参していたではないか。犯人が上手くトリカブトを持ち込んだとしても、もし気付かれたときはどうするつもりだったのだ? そのときは包丁で刺し殺すつもりだったのか? もし俺が犯人なら、トリカブトを食べさせて殺すよりも、手間暇を掛けずに最初から刺殺するだろうな。

松浦の思考が混乱し始めたとき、各務がドアを開けて、「よろしいですか?」

と入ってきた。

お陰で、乱れて纏れた思考をシャットダウンすることが叶った。

「宿泊者全員から事情聴取した結果報告書がやつと出来上がりましたので、取り急ぎ持つてきました」

と、各務が綴じ紐で纏められた2冊のファイルを机上に置いた。1冊は正本で、もう1冊は「コピーした副本らしい。

カツオ節を与えられた猫の如き俊敏さでそれを取り上げると、貪るようにして松浦は目を通し始めた。それを横目に各務も副本のページを開いた。

各調書は、住所、氏名、年齢、電話番号といった基本事項が冒頭の部分に書いてあり、続いて、ここへ来た目的、午後7時から9時までの間における行動、被害者について何か知っているか、不審な出

来事を見聞きしなかつたか、といった項目に分けられていた。

大勢から短時間で効率良く情報を集めようとすれば、この手法はかなり効果的である。

30分程度を費やしたところで、一通り読み終えた。

「君の感想はどうだ？」

「興味を引く証言が、2件ありましたね」

「ひとつは宮岡、もうひとつは及川のものだな」

「ええ。でも宮岡管理人の言っている怪しい人物は、今朝の大騒動が起ころる前にここを立ち去っていますので、住所地を管轄する所轄署に要請してみますが、急には呼び戻せないでしょう」

「この及川という夫婦が田撃したという『被害者が隣のロッジの宿泊者らしき人と何かあつたように見えた』というのは？」

「名簿によると、隣接するロッジの借主は高野誠一、44歳の会社員ですね。田撃情報に出てくる若い女性というのは、田撃された軽乗用車から逃つてみたところ、勤務先が高野と同じ所でした。おまけに、その女性は高野の南隣のロッジを予約しております」

「そうか。何か特別な事情がありそうだな」

「早速、今から呼んできましょ」

と、各務が勇んで出て行つた。

松浦の前に、何だか落ち着かない男が座つた。

「まずはお名前から伺いましょう」

「高野誠」と言つます。ついでに職業も申し上げた方がいいのでしようか？」

「そうしていただけと有り難いですね」

「S市にある電器量販店で支店長を任せています」

「どうしてここに呼ばれたのかは分かっていますよね」

「いいえ、全く予想外のことで、正直言つて困惑しています」

「おやおや、それは困りました。あなたとお連れさんが被害者と何か話してこられたと情報がありましてね。ところが、あなたへの聞き取り調査では、そのような話は一切なかつた。これはいつたいどういうことなのかと、小さな疑問が湧いてきましてね」「そのような無責任なことを言つてはいるのがどこの誰かは知りませんけど、全く身に覚えのないことですね」

「ほほお、あの夫婦が証言されていることは嘘だと？」

「きっと何か勘違いされているのでしょうか。私は一人でロッジを借りていて、最初から連れなんておりません」

「そうですか。我々の調査では『寺沢のりか』という女性が、あなたの隣のロッジにお泊りとして、その女性は恐らく高野さんと同じ会社にお勤めだと思うのですがね」

「・・・」

案の定、高野は黙り込んだ。

「どうなんですか？ 被害者と顔見知りだつたのではありませんか？」

「申し訳ないです、私は本当に被害者の方を全く知りません。ただ・・・」

「ただ、なんですか？ 正直に話した方が楽になりますよ」

松浦が置み掛ける。

「ただ・・・」

机の上に置いた高野の手が、僅かに震えている。

「事件と関係がないのなら、包み隠さずにお話された方が良いですよ。我々はこの凶悪な犯人を探し出すためであれば、貴方の勤務先にもお邪魔いたしますからな」

「お願いです刑事さん。」これから話すことは家内と会社には内緒にしてくれますか?」

高野が消え入りそうな声を絞り出すようにして、頭を垂れながら言った。

「それはあなたが話してくれる内容次第ですが、事件と無関係であれば希望に沿うことも吝かではありません」

松浦には、高野が言わんとする「ことがどうこうもの、大方の予想が着いていた。間違いなく女性関係だろう。

「昨夜は寺沢君とここで一晩過す計画でした。下手にラブホテルなどに行くよりも、じつは場所の方がむしろ安全なのです」

「寺沢は、あなたの部下なのですね?」

「ええ、3年前に入社した女性で、仕事を覚えるのも早いし性格も良くて、常々から可愛がつておりました」

「そして気が付けば、可愛をがつについ愛情に変わつていつたという訳ですね」

「言い訳はしませんが、刑事さんだってそういうこともあるでしょう」

「ひとりの男として理解できないとは言いませんが・・・、それが被害者とどう繋がるのかを説明してください」

冷静を装つかのように、松浦は次の質問に移つた。

「私は普通に昨日の昼間にやつて来ましたが、彼女には夕方に到着するよう伝えておりました。日が暮れてからであれば、誰かに見咎められる可能性は低いだろうと考えたのです」

「さぞや彼女の到着が待ち遠しかったことでしょうな

松浦の言葉には、若干の厭味とささやかな妬みが込められているようだ。

「寺沢君が到着したのは夕刻の6時過ぎでした。辺りは薄闇に包まれ始めようとしていたので、彼女は私のロッジ前に車を停めてしまったのです。私も安心しきつた状態で、彼女を出迎えるために表に飛び出して行きました。その時、お隣のロッジのテラスに人影が見えたのです」

「それが被害者の吾妻さんだつたという訳ですね？」

「ええ、車のドアを閉めた音に反応したのでしょうか、ちょうど二つちを見ていました。それだけならまだ良かつたのですが、その人影が彼女に向かつて『あらあ、寺沢さんですよね？』と声を掛けてきたのです。その時の我々はと言えば、大パニックを起こして頭の中が真っ白になつておりました。予想外の出来事に2人とも慌ててしまい、後先のことも考えずに咄嗟でロッジに逃げ込んだのですが、後になつて落ち着きを取り戻すと、何と拙い行動をしてしまったのだろうと後悔します・・・」

「不倫の場面を目撃されたので、口封じのために犯行に及んだのですね」

「ちょっと待つてください。それは完璧に違います。神に誓つて申し上げますが、私は絶対に殺人などしていません。その後で少し冷静さを取り戻してから、一人でいろいろと相談しました。彼女が言うには、吾妻さんは近所に一人住まいしている女性で、無闇に他人のプライバシーを言いふらすような人ではない、どちらかと言えば心優しい人らしい。そこで、ダメモトでも仕方ないではないかと開き直つた私達は『ここで見掛けたことを内密にしてもらえないか』と、二人揃つてお願いに伺うことにしたのです。そのときには外灯が点されていましたが、あの人はまだテラスで何か料理をしているところでした。恐らくは軽蔑されるだろうと思わなくもなかつたのですが、あの時の私たちにとつてそんな事はどうでもよい些細なことでした。ただ『分かりました』との一言だけが欲しかつたのです。

何度も何度も頭を下げ、最後には土下座までしました。私たちにつてはとても長い時間に感じましたが、やつと『分かりましたから頭を上げてください』とおっしゃっていました時には、ふたりで抱き合って半泣きしていました

「もし本当にその通りであつたとしても、あなた達ふたりは100%の安心ができなかつた。だから、やっぱり殺してしまおうと考えたということも考え方られます」

「いいですか、刑事さん。私たちの行動が道義的には罪と呼ばれるものであつたとしても、たかが不倫ではありませんか。殺人という大罪を背負つてまでして守らねばならないことは思ひません。もし家内にばれたとしても離婚すれば済む訳だし……」

「そんなもんかね」

「好きな女と愛し合つことが、それほど悪い事だとは思つていませんし、妻にばれて離婚ということになつたとしても、そのときは彼女を新しい妻にすればよいのですから……。そりやあ、いくらかの慰謝料を払わされることになるでしょうが、それを避けるために殺人という方法で解決しようなんてことを考えたりはしませんよ」「それは立派なお考えだ。それはそれとして昨日の午後7時から9時の間、どうされました?」

「吾妻さんのロッジから戻つてきたときには7時近くになつていたと思います。それから予定通りに寺沢君と一緒に料理をして、ワインを飲みながらの食事を終えた時には9時前になつていたと思います。それから風呂の用意をして、その後は……。そこまで答えるいといけませんか?」

「今回はそれくらいで結構でしょう。ただし、あなた達への嫌疑がこれで晴れたとは言いかねますので、またお尋ねすることがあれば御協力をお願いします」

松浦はそう釘を刺しておいてから、高野を解放した。

高野が帰つたあと、松浦は彼の証言を分析する。

それなりに一応の辻褄は合つていた。次の手順としては、寺沢のりかという不倫相手を取り調べておくべきかと考えた。その証言と突き合わせることで、どちらかが嘘を吐いていれば自ずと矛盾点が浮き出てくるものだ。

それとは別に、鑑識からの報告書について松浦は考える。

現場近くに残されていた足跡は、ペアのもの思われるものが一組と、単独のものがあつたということだが、ペアの方は恐らく高野と寺沢がガイシャに『ここで見たことは内緒にして欲しい』と懇願しに行つたときに付いたものであろう。そして、単独の方は鐘見が発見したときに付いたものと考えられる。

それ以外に、これといって怪しい足跡は発見されていない。

犯人が彼ら以外の誰かだと想定するなら、ガイシャに近付くためにどこから入つたというのだ？

論理的には玄関から入つたということになるのだが、十数人のキヤンパーが同じキヤンプ場に居るとしても、余程の大声でもない限りは届かないくらいにあのロッジとはかなり離れている。そのような場所で女性が一人だけで過ごすというとき、果たして玄関の鍵を掛けないものだろうか？　いや、普通の神経なら必ず掛けのことだろう。

ということは、安心して招き入れても構わないという関係の誰かが訪れたとでもいうのだろうか？　そして、その人物が犯行に及んだのか？

そう考えれば、3人以外の足跡が残されていなかつたとしても何ら問題はない。どこからも怪しい指紋が発見できなかつたことも、最初から殺害目的で訪問したのなら、手袋を嵌めるくらいの準備はしていたことだろうから、そう考えれば矛盾はない。

犯人は正々堂々と玄関から入り、ガイシャの隙を見て、或いはテープルから離れさせるような巧みな話術でガイシャを移動させ、その

間に隠し持っていたトリカブトを天麩羅にした。そして、それとは気付かないままに、ガイシャは天麩羅を食べてしまった。やがて毒が廻ったガイシャは、床に倒れ込み息絶えた・・・。

死亡したことを確認してから、証拠となるトリカブトを急いで搔き集めると、犯人は再び堂々と玄関から出て行ったということか。そうだとしても、あの背中に刻み込まれていた『罰』という文字の謎を解決できる訳ではない。死後8時間以上も経つてから、あの文字は書かれたらしい。それはいつたいどういう訳なのだ？

そういうことが有り得るのかどうかは別として、何らかの恨みを原因として殺したのでなかつたということ・・・、それも有りなのか？　怨恨で殺したのだと思わせるために『罰』という文字は刻まれたのだと、そう考えれば何となくそのような気もしてくる。だが、怨恨で殺したのでないとすれば、他にどういった動機があるのか？

世の中への不満を晴らすために殺したかつた？　理由もなく兎に角殺したかつた？　殺すことでの快感を得ようとした？

確かに、最近の殺人事件における動機は、これまでの我々の理解を超えている・・・。

それにつけても、よくよく考えてみれば、玄関から入ることが可能な人物が一人存在するではないか。

「おい、今から出掛けるぞ！」

各務に向かつてそう言い放つと、松浦は勢いよく椅子から立ち上がつた。

「昨日の午後7時から9時に掛けての時間、あなたはどこに居ました？」

相手を睨むようにして、松浦が訊いた。

「どこにいて、もちろんここに居りましたよ。ずっとと

「それを証明してくれる人が誰が居ますか？」

「ここは私一人で切り盛りしていますから、誰か居るかと言われましてもね」

「あなたは職務上、全ロッジの合鍵を持っていますよね？」

「それは当然でしょう。それがどうかしたとでも？」

「いやあ、あの事件のあつたロッジなんですが、外のテラスに近付いた足跡は3人分しか見付からなかつたのですが、その3人が誰かは既に判明しております、犯人である可能性はかなり低い。そうすると、もしかして玄関から入つた第4の人物が居たのでは？といふ疑問が湧いてきたという訳です。被害者が招き入れたという線も考えられなくはないのですが、鍵を開けることができる人物という線も視野に入れなくては・・・と、まあそのような考えも成り立つのではという訳です」

「ほほお・・・つまりこの私？」

困惑したように答えたのは、ここに管理人である富岡重里であつた。「端的に申すなら、そのとおり・・・あなたのことです」

「どうや顔で、松浦が詰め寄つた。

俯いたままの体勢で頭をポリポリと搔きながら、富岡は何かを必死で考えていたようだつたが、しばらくすると顔を上げ、

「証人というのは居りませんが、別の方方法でアリバイを証明できればいいのですよね？」

と、丁重な言い方で、念を押すかのように尋ねた。

「ああ、証明できるといふのであれば、我々もその方法如何にまで拘つたりはいたしません」

「それならば、証明できますよ」

そう言つと、富岡は1冊の帳簿を松浦の目の前に置いた。表紙には『宿泊予約簿』と記されていた。

「ほら、ここを見てください。ここには宿泊予約の電話を受けた時刻も書かれています」

松浦が確認すると、宿泊予定年月日と予約者の住所氏名といったテ

一タの他に、予約電話を受け付けた時刻も記入されていた。

「それで、これが証明になるというのはどういう意味ですかね？」

「分かりませんか？ この帳簿は予約のあつた順に記入するように出来ています。つまり、受信時刻を見ていただければ、いつ私が電話に出ていたかが一目瞭然ではありませんか」

富岡に説明されて、再び松浦が目を通す。

7時から9時までの間には、予約の再確認電話も含めて全13回の予約電話があつたようだ。

「ゴールデンウイークのこの時期・・・特に3日から5日に掛けては利用者が多いので、あの夜は何本も予約電話が入りまして、一番長い間隔のときでも、14分間しか開いていません。会話時間が5分以内ということはないので、私が電話に出ていない時間は最大でも9分ほどだということになります。この管理人棟からあのロッジまでは片道でも5分は必要ですから、往復だと10分。すると犯行に使える時間はゼロ分以下ということになりますか？」

傍に置いてあつた電卓を叩いて、その答え表示した液晶画面を富岡が覗した。

「計算は合っているようだな」

『 - 1』と表示された電卓を確認した松浦は、短くそれだけ言つと、肩を落として回れ右せざるを得なかつた。

午後になつて、海崎奈央美が到着したという情報が伝えられた。真つ先に花を手向けてたいという本人からの強い希望もあつて、まず現場に立ち寄つて簡単な弔いを済ませた後で、こちらの仮設捜査本部にやつてくる予定だという。

そして数分後、ドアが開かれた。

各務に案内されて入つてきたのは、上品な身形をした純和風といつた風情の、松浦が予想していた通りの女性であつた。しかし、続いて度の強い眼鏡をかけた青年が彼女に付き添つようにして入つてきたのは想定外であつた。

早速、松浦による事情聴取が開始された。

「お疲れのところ恐縮ですが、最初にお名前からお伺いしましょう」「鵜川世範・・・長良川風物詩鵜飼の鵜に」

何故か青年がそう答え始めたので、

「いや、そうではなくて、こちらの女性に尋ねたつもりですが」あわてて松浦が制止した。

「それは失敬」

と、青年は数センチだけ頭を下げるから続けた。

「叔母さんの方なら、海崎奈央美・・・異常海面上昇現象の海に長崎名物カステラの崎。奈良県明日香村の奈に中央大学合格の央、それに美人局の美と書いて奈央美」

松浦には、彼の例示する熟語の持つ役目がよく分からない。

「君に訊いたのではないが、まあ本人確認といつても形式的なものなので、代返でも認めましょう」「またまた失敬しました」

鵜川という青年は、子供のような笑顔で謝つた。

「叔母さんということは、あなたの甥子さんというわけですか？」

邪魔されても堪らないとばかりに、海崎の眼前にまで顔を寄せて、

松浦が訊いた。

「ごめんなさいね、刑事さん。わたしがのんびり屋なもので、この世範君がイライラして先に答えてしまったくなるらしいです」

海崎がそう擁護すると、鵜川は頭を上下に動かして、うんうんと頷いた。

「では本題と行きましょう。あなたと西妻彩子さんの関係について教えてください」

「関係と言われても、それほど特別なものではありません。中学で同級生となつたのが最初の出会いで、たまたま家が近かつたこともあって、お互いに成人してからも、ときにはカラオケに行つたり食事をしたり、たまにはふたりで旅行もする・・・そういうお付き合いですけど」

「中学のときからだと、かなり長いお付き合いとなりますな」

「20年くらいかしら」

「ところで、現場を見ていただけましたかな？」

「ええ。見たくはなかつたというのが正直なところですが、彼女がこの世に生きていた最後の場所なのだからと思つて、しつかりとの目に焼き付けてきました」

「親友の目を通した景色として、何か感じたことはありませんか？」

「特にはないです。こんな淋しい場所で・・・と思つと、ただただ無念さが込み上げてくるだけでした」

海崎はハンカチで目頭を押さえた。

「では、ここからが大事な部分なので、よおく考えてからお答え願います」

そう言つと、何枚かの写真を机に並べた。

思わず海崎は目を背け、鵜川は顔を近づけて食い入るように見ている。

「申し訳ないですが、友人を殺めた犯人を捕らえるために、ここは

ひとつ耐えてくださいな」

「『じめんなさい・・・。私が出来る限りの御協力をしないと、本当に彩子には申し訳ないのですよね』

「既にお聞きになつたかも知れませんが、お友達は全裸で発見されました。そしてこれは背中を『写』したもののです」

「何でひどいことを…」

小さく叫ぶと、海崎は両手で田を覆つた。

「我々の経験から申し上げると、このようなことをされるところには、怨恨の線もないと考えておりましてね。そういう心当たりはありませんか」

「それはありません。彼女は誰からも好かれていました。誰かから恨みを買つていたということは絶対ないです」

「この『鬱』という漢字から、何か思い当たる』ではないでしょうか？」

「彼女には一番似合わない言葉・・・としかお答えのしようが『ございません』

海崎が、不快感を隠そつとせず田松浦を睨み付けた。

「それでは話題を変えましょ。お友達は独身ですか？」

「彩子は24歳のときに一度結婚しました。夫婦ともに子供を欲しがつていたのですが、残念なことにとうとう恵まれないまましてね。そして5年前に良彦さん・・・これは田那様のお名前ですが・・・その良彦さんを交通事故で喪くされてからは、一人暮らしの生活にじつと耐えていました」

「すると、ついつい淋しさに耐えかねて・・・とこうじつもあつたのでは？」

「淋しそうにしていました点については否定いたしませんが、だからと言つて、刑事さんが想像されていらっしゃるような類の話は、たとえそれが根も葉もない噂程度のものであつと、ただの一度も耳にしたことば『ございません』。良彦さんをとてもとても愛されていましたから、あの彩子に關してはそのようなことはないと断言できます」

「お友達もなかなかの美人ですから、当人がいくらそのように考へていたとしても、周りの男からすれば『説きたくなることもあつたのでは?』

「あつたかもしだれませんが、それなりに防御の手を講じていました」「たとえばどのよつな?」

「そのような事態になることをなるべく避けるため、男性の集まる席にはできるだけ参加しないよつ努められていました」

「では質問を変えますが、被害者は山菜に詳しかつたですか?」「私なんかとは比較にならないくらいに詳しかつたですね。彩子さんはもともとガーデニングが趣味だつたので、植物を覚えるスピードは人並み以上のものがありました。何度も同行させていただいたことがあります、私なんかは間違つてばかりで、ドクニンジンとセリの区別が付かずにつぶされたことも」ぞいいます。・・・でもそれが何か?」

「それがですね、直接の死因は、どうもトリカブトの毒らしいのです」

「トリカブトですか・・・。彩子さんが山菜採りを始めたのは2年くらい前からですので、私よりは格段に詳しいとは言え、こういうものは経験によつて学習していくものなので、初めて見付けた種類のものだと、やはり写真と見比べながら確認しなくてはなりません。だから彩子も、常に専門書を携行していました。先ほども申し上げましたが、植物の特徴を見分ける才能には恵まれていたので、採取を数回経験したあとでなら間違えるなんてことは考え難いですね」
「おつしゃられる通り、ロッジ内にあつた持ち物の中には『山菜入門』というタイトルの本がありました」

そう言つて、松浦は一冊の本を取り出した。

「その本というのがこれなんですが、見覚えはありますか?」

「ええ、彩子がいつも携帯していたのはその本です」

「トリカブトはここに載つています」

と言ひながら、松浦が付箋の付けてあつたページを開く。

「このページは「ワソソウの説明のためのものですが、間違えやすい毒草といふことで、トリカブトの写真が右ページに並べられています。これを見る限りにおいては、かなり似ているとは言え、互いの特徴を見比べる間違えそうにないですね」

「彼女の才能をもつてすれば、写真を見れば一目でその違いは分かつたはずです」

「そうでしょ。ところで、不思議なことなのですが、この本の内側からは指紋が一切検出されなかつたのです」

「それは単純に、犯人が不用意に本を触つてしまつて、これはマズイと思って拭き取つたということではないのですか?」

「ここまで何とか大人しく聞いていた鶴川が、とうとう耐え切れなくなつたのか口を挟んだ。

「全ページを拭くのは大変だぞ。それなら一層のこと本を持ち去れば済むことだ。その方が簡単だし、時間も必要としないだろ?」

「なるほど、流石に本職だけのことはありますね。ブランボーです」何故か愉快そうに軽く拍手しながら、鶴川が言つた。

それを意識的に無視するかのように、松浦が。

「要するに、被害者が男性問題を抱えていたとは考え難い。そして、トリカブトを間違つて採取したという可能性も、ほほゼロに近い確率ということですね?」

と、海崎の証言から得た内容を簡潔にまとめると、もうこれ以上は訊くべきことも思い付かず、御礼を述べてからふたりを帰した。

海崎奈央美から得られた情報によれば、ガイシャには特定の男性と静いを起こすような問題があつたようには思えない。そうだとすれば、毒草を食わされて裸に剥かれて背中を刻まれて・・・そのような悪意に満ちたかのような犯行を、いつたいどこの誰が行なつたのだというのだ。

そう・・・、不可解なのは動機だ。

ただの平凡な32歳の女性を殺すことによって、どのような動機が存在するというのだ？

強盗、愛情のもつれ、金銭問題、衝動的な性犯罪、そのどれでもないとすれば、他に何が考えられるだらうか。

もう一度、最初から考えてみよう。

このキャンプ場にひとりで遭つてきた吾妻彩子という女性が殺された。発見したのは北側に数えて2軒目となるロッジを借りていた鐘見隆広。だが、このふたりの間には接点となるものは皆無である。また、南隣のロッジを借りていた高野とその愛人寺沢が、生前の被害者との間に些細な問題を起こしていた。これが犯行に結びつく可能性に関しては、まだ結論が出せるまでには至つていない。被害者は裸にされたうえ背中に「罰」という文字を刻まれた。傷口に生活反応がないことから、死後数時間経つてから刻まれたものと推測される。性的被害は受けていない。現場から失われたものはない可能性が高い。犯人のものと確定できる指紋は発見されていない。犯行に使われた凶器も発見されていない。凶器は被害者が持参した包丁という可能性が高い。犯行を目撃した者も異様な物音を聞いた者もない。死因はトリカブトを食べたことによる中毒である。しかし海崎によれば、被害者は専門書さえあれば山菜を間違うはずがないという。そして、現場には『山菜入門』という専門誌があった。ということは、犯人がトリカブトを持ち込んだことになる。死亡した事を確認してから着衣を切り刻んで裸にした。それなのに暴行したという形跡はない。裸にした理由は『罰』の文字を刻むことにあつたのだろうか。

今までに得られた情報から考えられるのは、まあこんなところか。

「さあ、ここからどう推理する？」

誰にも聞き取れそうにない音量で、松浦は独り言を吐いた。
背中の文字に何かの鍵が隠されているはずだ。『罰』とは何を意味しているのだ？

これまでの捜査では、他人から恨みを買つような悪い情報は浮かんでこない。そうなると、『ぐく最近に何かがあつたのかも知れない。しかし、決して人目に付き難い場所とは言えないキャンプ場まで追いかけて来てまでして、あのような犯行に及ぶものだろうか。もつとやり易い場所は他にいくらでもあるではないか。

場所を選んでいる余裕もないくらい焦つていたと考えればどうだ。たとえば、このキャンプ場に着いてから後に、殺意を抱かれるような何らかの出来事があつたとすれば・・・。

たとえば、ガイシャが見てはいけないものを見てしまつたとか、聞いてはいけないものを聞いてしまつたとか。

「死体発見の前日に、キャンパーの中で何か揉め事があつたという情報はなかつたか？」

報告書を書くためにパソコンを打つていた各務に向かつて、松浦が問いかけた。

「そういう報告は、何ひとつ聞いていませんね」

パソコンのモニターから目を離すことなく、各務が答える。

「そうか・・・」

よく考えれば、それもそうだ。あそこまでの残虐な装飾を施そうとする強い執念が、昨日一昨日に起つた出来事を原因として生じるはずもない。

すると、どういうことだ？ 動機は怨恨などではないということか？ 怨恨でないとすれば『罰』の目的が分からない。

「まるで堂々巡りだな・・・」

大きく溜息を吐いてから、松浦はとつへに冷めきつた湯呑みを口に運んだ。

そのとき、帰路に着いたはずの海崎奈央美が戻ってきた。もちろん鵜川を同伴していたが・・・。

「ど、どうされました？」

想定しなかつた展開に、口の中にお茶が残っていることを忘れた松浦が、零を垂らしながら訊いた。

「先ほどは余りにも恐ろしいことばかりで気が動転しておりまして、お伝えすることを忘れてしまっていたのですが、帰りながら彩子のことをあれこれ考えていたら、彼女からメールが届いていたことを思い出したのです」

「これで、とうとう事件解決って感じですよ」

横から鵜川がしゃしゃり出てきて、得意顔でそう宣言した。

「そんなに重要なことが書かれているのですか？」

「ええ、このメールが解決に結びつくはずだと世範君が言つし、私もそういう予感がしてならないのです」

奈央美はそう言つて、携帯電話を操作していたかと思つと、やがて松浦の眼前に差し出した。

見せられたメールの文面は、

『今日はいろいろな山菜を摘んで来ました。

これから天麩羅にしていただきますよ～～～。

そうそう、山菜採りは何年もやつていて、

今更驚くほどの珍しいものに遭遇することが少なくなつたけれど、今日はとても珍しいものを見つけたのよ。

それが何だか奈央美に分かるかな？

正解はね、ハツ葉のクローバー。

四つ葉が幸福のシンボルだ言われているのだから、これは幸福が2

倍つてことなんだよね～＾＾

早速、押し花みたいにして保存しましたよ。

では到着を待つてからね』

画像が添付されていることを示す表示を、奈央美がクリックした。そこには、採取してきたと思しき山菜を写した画像が添付されていたが、木立の中における光量不足の所為なのか、残念ながらその画質は不鮮明であった。

「刑事さん、どうですか？ これはすごい手掛けりでしょう？」

松浦の数センチ近くまで身を乗り出して、鵜川が得意げに言う。

「現場の遺留品の中からは、クローバーがあつたという報告はなかつた。つまり犯人が持ち去ったということか？」

「流石はお見事な推理。クローバーが消えていたということは、誰かの手により持ち去られてしまった・・・。恐らくそれが正解ですね」

「それくらいは簡単に解ることさ」

松浦は胸を張つて答えた。

「消えたクローバー・・・、それが最後の鍵という訳でしたね」

鵜川が海崎の肩に手をやりながら、まるで慰めるかのように言つ。

「あとはよろしくお願ひします。絶対に犯人を逮捕してくださいね」

そう言つと、海崎奈央美は丁寧に頭を下げるから、鵜川とともに再び帰つていった。

予想外の来客が去つた後で、松浦は椅子に凭れて思考する。

八つ葉のクローバーはどこにもなかつた。ということは消えたということになる。そこにどういうヒントが潜んでいるのだろう・・・。

「俺の幼少時代の記憶が正しければ、押し花つてものは、大抵は本に挟んで作るんだよな？」

一人で考えることには限界を感じたのか、傍でまだパソコンを打つて

いた各務に訊く。

「僕の記憶でも、押し花つてのは本に挟みますよ」

「現場からハツ葉のクローバーが発見されていたとは聞かされてい

「…………」

「すると、犯人が持ち去ったのか？ そうだとしたら何のために？」「自分は四つ葉のクローバーさえ見つけたことがないですが、殺して奪うほどの価値があつたのかも知れませんね」

「…もじもた…その葉にはそれほどまでの価値があり、それが目的で殺害しておいて盗んだのだと考へるとしても、犯行現場から一刻も早く立ち去ることを後回しにしてまで、背中にあのような刻印を施さなくてはならなかつたという理由が、果たしてビリにあつたのだらう？」

「海崎さんにもメールしていたことを犯人は知らなかつたのだと考へれば、それほど奇妙なことでもないでしょ。本当の目的である『八つ葉窃盗』を誤魔化すために『痴情殺人』を演出したと考えられなくもないのでは? 確かに、誰かに目撃される可能性は高くなりますが、八つ葉に余程の価値があつたなら、それも有り得ることでしょ。」

が、と答えながら、そのままの姿勢でパソコンを叩いていた各務だった

「ギネスブックによると56葉が現在の世界最高記録らしいですね。ちなみに発見者は日本人です」

と、興奮気味に声を上げた。

「…………それほどの枚数なら、とんと珍形をしてくるんだなー。
? それにしても56葉とは凄いな」

「ただし、それは特別な栽培をしている株からのものらしいで、自然界でのことになると八つ葉というのは相当に稀なるものようです」

「すると、マニアにとっては、殺人までして奪い去るだけの価値があるといふことなのか？」

「いや、そうでもないようですね。少なくとも、四つ葉以外には取引き市場は存在していません。唯一四つ葉だけは幸福のイメージとして結婚式での料理皿に添えたり、あるいはアクリルに閉じ込めたストラップを作つて贈り物にするために栽培している業者が存在するようですが、万年青のように観葉植物としてのマニアによる売買市場が存在するわけでもなく、誰かに自慢して悦に入るというサイトも存在しないみたいですね」

「だとしたら、犯人は何故、下手をすれば誰かに目撃されるかもしれないというリスクを冒してまで、ガイシャを裸にしてから文字を刻むといった手間暇を掛けたうえに、更には全てのページから指紋を消し去ったのか。そこまでして八つ葉のクローバーを持ち去った理由は何だろうか？」

「それは自分にも全く解りません」

「しかし、あの本にクローバーは挟まれてはいなかつたという歴然たる事実がある。これはどういうことだ？」

やつとトンネルの先が見えてきた気がした途端に、再び新たな闇の中に突入したという感じだ。

理由は分からぬが、犯人は被害者を殺害した後で八つ葉のクローバーを盗んだのだ。そのこと隠すために遺体にあのような文字を刻み、八つ葉を盗むときに付いてしまった指紋を全て拭い去つた。本そのものを持ち去つた方が簡単なのにそうしなかったのは、そこに何か理由があつたのだろうが、今までのところその理由は分からぬ

謎が解けないままで、3日の朝を迎えた。

天気は快晴のようだが、松浦の心はどんよりと雲つていた。今にも降つてきそうな趣きさえある。

そんなとき、大きな足跡が近付いてきたかと思つと、入ってきたのは各務であった。

各務は松浦の傍に近寄り、耳元に口を近づけた。

「例の、管理人からの聞き取りにあつた『被害者の住所氏名をしつこく尋ねて来たという男』がやつて来ましたが、どういたしましょう」

「ふむ。直ぐにここへ連れて来るんだ」

招き入れるようにとの指示を受けて一旦部屋を出た各務が、数分後に再び入ってきたときは、40代後半かと思われるヒゲ面で坊主頭の男を同行していた。

「まず、お名前から伺いましょう」

「三ノ宮四郎と申します」

「よろしければ御職業もついでに・・・」

「アマチュア写真家というところです」

「その写真家であるあなたが、管理人から被害者の名前などをしつこく聞き出そうとしたという情報があるんですが、理由を『ご説明いただけますか?』

「別に疑われるような怪しい理由ではないんですよ。どこから話せばいいのやら・・・そうですね、あれは一日の午後のことです。どこかに良い被写体がないだろうかと山の中を探し歩いていたとき、偶然にあの人にお会つたのです」

「ほほう、そのときの情況を詳しく話していただけますか」

「そのときの私の眼前には深い草叢が広がっていました、その中から突然のように彼女が現れたのです。ちょうど綺麗な花を抱えて草叢から立ち上がったその様子が、周囲の風景と相俟つて実に神秘的な雰囲気を漂わせていたので、そこは写真家の本能でしうな・・・思わず『どうか一枚だけでも撮らせて下さい』と声を掛けたという次第です」

「それから何枚か撮影した?」

「ええ、数十枚ですかね。もちろんデジタルカメラですから、その

程度の枚数なら少ない方でしょ。モニターを開いて彼女にもお見せしましたら、好感触な反応を見てくれたので、それなら1箇所の撮影だけでは勿体無いと思い、場所を変えてあと2箇所でも撮影させていただきました

「彼女は快く応じてくれたのですか？」

「さあどうでしょ。写真家なんてものは少々強引に押すくらいでないとダメでして、彼女からしてみれば迷惑に思っていたかも知れませんが、かといって遠慮ばかりしてては良い作品は撮れませんからね。大和撫子が『ダメ』と言っている段階では、それは英語の『イエス』を意味しており、怒られて初めて『ノー』の意味と解釈するようにしています」

「何か個人的なお話とか？」

「私はもっぱら写真に関しての話題を話すだけで、彼女はと言えば山野草のうんちくを話すだけで、それぞれが得意分野について喋つていたといった感じですね。初対面なのだから普通はそんなもんでしょう？ それで別れ際に、写真が出来上がったら送りますので名前と住所を教えてもらえませんか？」とお願いしたのですが、何故か拒絶されまして・・・やつと教えてくれたのが苗字だけです。こんなことは滅多にないんですがね」

「それが理由で、まだ夜明け前だとつ時間にも拘らず、管理人のところに押し掛けに行つたという訳ですか？」

「はい、そのとおりです。管理人は明らかに不機嫌な態度でしたが、でも仕方なかつたのですよ。あの日の午後からは外せない大切な予定が入つていて、ここを5時には出発しないといけなかつたのです。その前にどうしても彼女の名前だけでも知りたいと・・・。彼女のお陰で滅多にないほどの素晴らしい作品が撮れたので、どうしても彼女には御礼を込めてお届けしたいと思いまして・・・だから疚しい理由などは一切ありません」

「後ほど、そのカメラと画像を提出いただくことになると思いますので、もちろんご協力願えますでしょうな？」

「ええ、彼女を殺した犯人を見付けるためなら喜んで……用が済んだら当然返していただけますよ」

「あなたへの容疑がすっかり晴れたならお返します」

「ええつ、私が容疑者ですか？　まさかそんな……、それは違いますよ！　私は写真を撮らせて貰つただけですから！」

「そんなに興奮なさらずに……。今のところ、昨日このキャンプ場に居た人物は全員が容疑者ですから……。最後に、昨夜の午後7時から9時にかけての行動を教えていただけますか？」

「ロッジの中はずうと大人しくしていましたよ。昨日の撮影した画像データの中から消しても構わなさそうな画像を削除して、残すべき画像はパソコンに移動させて、コントラストや画質を調整したりしていました。そういう作業に一段落着いたときには、10時前になつっていたと思います。だから当然、ロッジからは一歩たりとも外に出ておりません」

「当然ですか？　だがそれを証言してくれる人も、これまた当然に居ないのでは？」

「まあそうですが、まさかこんな事情になるとは思つていませんのでね」

「ところで……テラスにあつたテーブル上の写真も撮りましたか？」

「ええ、何枚か撮つたと思います」

「そのとき、そこにトリカブトはありましたか？」

「トリカブトですか？　申し訳ありませんが、トリカブトがどういうものか……私には山菜の知識が全くありませんので、それは分かりません」

「そうですか。またお話をお聴かせいただくことがあるかも知れませんが、本日はひとまずお引取りくださつて結構です」

各務が三ノ宮を伴つて出て行くのを見送りながら、松浦はまたまた天を仰ぐ。

撮影された写真との突合をしてみないことには、三ノ宮の証言に嘘

があるかないか・・・その判定を下せないのだが、彼の供述にはそれなりに辻褄は合っているように思えた。

この男が犯人なのか？ それとも犯人ではないのか？ 松浦は椅子から立ち上がって、窓の外に広がるキャンプ場を眺めた。

到着した時に比べて、テント数が増えていることだけは確実に分かった。そうか・・・ゴールデンウィークが始まっているのだ。世間では恒例となつていてるこの大型連休も、松浦にとつては何ら特別な意味を持たない、ただの詰まらない勤務日の一日でしかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6383y/>

八つ葉のクローバー

2011年11月21日15時41分発行